

Title	ごみ捨て行動のパターンとその対応策に関する研究： 心理的手法を用いた介入計画案に向けて
Sub Title	
Author	高橋, 直(Takahashi, Nao)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	1997
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.46 (1997. ),p.72- 79
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	学事報告：博士
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000046-0072">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000046-0072</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

本論文には学説史を塗り替える両墓制の分析や、ケガレからカミへの展開、先祖祭祀に祟り・血統・親近感など三種の感情を読み取るなど、随所に独創的な見解が提示されている。しかし、第一部・第二部・第三部の論述が各々独立した印象があり、有機的に統合されているとは言いがたい。この間の密接な繋がりが論述されれば、よりよい論文になったと考えられる。また、ハラヘをケガレからカミへ逆転する装置として把握し、ケガレの中にカミを認める発想は興味深い、日本人全体に共通するかどうかは論証が不十分であろう。ケガレを祀り上げてカミにする考え方も民俗の中にあり、これとの関連についての考察も必要と思われる。特にケガレとカミを死穢観念と結び付ける部分は、より慎重な検証が必要である。また、死の観念をケガレと関連させて全体的に論じた箇所は、事例相互の連関が十分ではなく焦点を絞り込んで考察する必要がある。更に、これは本論文の枠外と思われるが、日本人の死・葬送・墓制を東アジアの中に位置付けて解明することが試みられたならば、より大きな枠組みの中でこれらの諸問題が理解できたと思う。以上のような問題点はあるが、本論文は両墓制・生死の構造的理解・ケガレ論・先祖祭祀などに新説を提示した独創的な研究であり、その成果を高く評価することが出来る。

上記の審査の結果により、筆者は本論文によって博士(社会学)の学位を受けるに値するものと認められる。

社会学博士(平成10年2月27日)

第1607号 高橋 直

ごみ捨て行動のパターンと  
その対応策に関する研究

—心理的手法を用いた介入計画案にむけて—

[論文審査担当者]

主査 慶應義塾大学文学部教授・  
大学院社会学研究科委員

文学修士

山本 和郎

副査 慶應義塾大学メディア・  
コミュニケーション研究所教授  
大学院社会学研究科委員

Ph. D.

岩男寿美子

副査 名古屋大学文学部教授・  
博士(心理学)

広瀬 幸雄

内容の要旨

1. 本論文の目的

ごみ問題は、個人の問題であると同時に社会的な問題でもある。この様なごみ問題に関して本論文では、従来からの対応策(規制的手法からの対応策と経済的手法からの対応策)と並行して用いることの出来る対応策を明らかにしようとしている。その対応策とは、社会的(あるいは文化的)な背景を考慮にいれながら行う個人的な文脈からの対応策のことで、本論文ではそれを「心理的手法を用いた介入計画案」と名付けている。

本論文の目的は、第一に「個人のごみ捨て行動のパターン」と「そのごみ捨て行動に対する対応策」の実態を歴史的な視点を含めて把握・分析することにより「個人のごみ捨て行動とその対応策」に関する文化的背景を明らかにすることである。第二の目的は、「個人のごみ捨て行動」に対する応用行動分析的な手法の効果を日常生活場面で実証的に検討することである。そして第三の目的は、それらの検討に基づき、文化的な背景を考慮に入れた上で応用行動分析的な手法を取り入れた「心理的手法を用いた介入計画案」の基礎的な構想を示すことである。

2. 本論文の構成

本論文の第2章・第3章では、ごみ捨て行動とその対応策に関する文化的背景に関してまとめている。また第4章・第5章では、現代の学生や主婦のごみ捨て行動に関する意識を調べている。そして第6章では、現代の学生のごみ捨て行動に関する「本音」を、社会的ジレンマゲームという形をかりて調べている。第7章・第8章では、本介入計画案の具体的な手法として位置づけている応用行動分析の効果を日常生活場面において実証的に検討している。第9章では、第8章までの検討をもとに「心理的手法を用いた介入計画案」の基本的な構想をしめしている。第10章では、各章の総括と今後の課題に関してまとめている。

3. 各章の要旨

(第1章の要旨)

第1章では、研究の目的、先行研究のレビューと本研究の意義・位置づけ、ごみ捨て行動にかかわる基礎概念、研究の構成と研究方法について述べている。また、「ごみ」「ごみ捨て行動」「心理的手法による対応策」や「心理的手法を用いた介入計画案」等の定義づけを行っている。以下に本論文の基本的な概念に関する定義を記す。

- ①ごみ：日常生活を営む個人が不必要だと判断したものの総称。「廃棄物」は一般廃棄物と産業廃棄物を合わせた総称であるのに対し、「ごみ」は一般廃棄物とはほぼ同じ概念で使われる。産業廃棄物は「ごみ」とは叫ばない。
- ②ごみ捨て行動：日常生活を営む個人が不必要だと判断したものを私的空間（自分の身边）から公的空間（自分の身边から離れたところ）へ移動させる行動のこと。本研究では、個人のごみ捨て行動のパターンは日常生活で経験される様々な強化子によって強化され獲得されると考えている。
- 本研究では、「ごみ捨て行動」の下位概念として「廃棄目的のごみ捨て行動」（不必要だと判断したものを廃棄を目的に私的空間から公的空間へ移動させる行動）と「再利用目的のごみ捨て行動」（不必要だと判断したものを再利用を目的に私的空間から公的空間へ移動させる行動）があると定義している。各時代状況によって、ある時は「ごみ捨て行動」＝「廃棄目的のごみ捨て行動」であったり、また別の時は「ごみ捨て行動」＝「廃棄目的のごみ捨て行動」＋「再利用目的のごみ捨て行動」であったりすると考えている。
- ③対応策：全体的なごみ問題を解決することを目的にとられた主に行政による条例や規制・提案をさす。本研究で扱う具体的な対応策は次の3つである。
- a) 規制的手法による対応策（従来の、有害な汚染源の特定化が明確に出来る問題に対して取られてきた手法のこと）
  - b) 経済的手法による対応策（発生源や加害者・被害者を特定しにくい時に用いられるもので、汚染者が負荷量に応じて費用を負担する手法のこと）
  - c) 心理的手法による対応策（発生源や加害者・被害者を特定しにくい時に、用いられるもの。「個人を取り巻く物理的な環境整備」と「適切な動機付けを行う環境の整備」を同時に行うことからなる本研究で提唱した手法のこと。この方法論には社会・文化的な背景を考慮した上で、応用行動分析の方法論が組み込まれている。
- ④心理的手法を用いた介入計画案：現在の社会的文脈からの対応策である規制的手法＋経済的手法に基

づいた対策と同時に用いることを想定した、心理的手法に基づいた対応策のこと。「心理的手法」の定義は③のc)の通り。

#### （第2章の要旨）

第2章では、まずはじめにごみの捨て方を歴史的な観点から6つの類型に分類している。そして、第1段階から第4段階までのごみ捨て行動のパターンとその対応策の特徴をまとめている。

本章で歴史的な検討をおこなっている理由は、本研究で提唱する「心理的手法を用いた介入計画案」の中に社会的（もしくは文化的）な背景を取り入れるためである。本章の歴史的な史料の分析により明らかになったことは次の3点である。

第一に、平安時代までは、ごみは敷地に穴を掘って捨てたり、道路に捨てたりするものであった。ごみが問題になったケースはあまりなかったようであるが、平安時代にはごみ問題が「都の美観を保つための問題」として取り上げられたことがある。この時の対応策は規制的手法によるもので、かなり厳しい罰を伴ったものであった。しかし、その効果はあまりなかったようである。

第二に、鎌倉時代の鎌倉には、都市機能維持の問題および防衛問題としてのごみ問題が存在した。この時代の鎌倉人は、ごみを溝に蹴り落とすというごみ捨て行動を主にしていたが、この溝は鎌倉を都市として機能させるためには重要なものであったので、この行為が問題になった。この時代の対応策は、規制的手法によるものであった。具体的には、町役人の監督の下で住人に掃除をさせるというものであった。

第三に、江戸時代の江戸には、都市防衛問題（防火対策）、都市機能維持問題（水路確保対策）、および新田開発に代表される開発問題としてのごみ問題が存在していた。この時代の江戸人は、初期には自宅周辺にごみを投棄していた。それが禁止されると次には水路に投棄していた。しかしほどなくそれも禁止され、最終的には幕府によって決められた「ごみ収集から運搬・処分」ルートにそったごみ捨て行動を取るようになった。この時代の対応策は、規制的手法によるものが主であったが、後期になると経済的手法とも考えられる対応策も取られるようになっていた。

#### （第3章の要旨）

第3章では、第5段階以降のごみ捨て行動のパターンとその対応策の特徴をまとめている。その際、特に①大正時代、②国家総動員法公布下の時代、③高度経済成長下の時代の3つの時代を取り上げている。そしてそれぞ

れの時代の主に主婦のごみ捨て行動を、婦人雑誌「主婦之友」「婦人の友」を通して分析している。

本章で歴史的な検討をおこなっている理由は、本研究で提唱する「心理的手法を用いた介入計画案」の中に社会的（もしくは文化的）な背景を取り入れるためである。本章の婦人雑誌「主婦之友」「婦人の友」の分析により明らかになったのは次の3点である。

第一に、大正時代の主婦達は、日常生活の中でリサイクル（廃物利用）を行っていたがその動機は、自己の家計の防衛のためであったと考えられる。この時代の対応策は規制的手法によるものであるが、罰則はかなり緩いものであった。

第二に、国家総動員法下の主婦達は、前期には戦争費用捻出のための貯蓄を増やすための手段として再利用をおこなっていた。そして後期には自分や家族が生き残るための手段として再利用をおこなっていた。再利用をおこなわないという選択肢はほとんど残されていなかったのがこの時代の特徴であったといえる。

第三に、高度経済成長下の主婦達は、「消費は美德」の時代の雰囲気を感じていて、その雰囲気が直接「使い捨て」につながったわけではなかった。消費を行うためには、節約をしてお金を貯めなくてはならなかったため「再利用」もかなり日常的におこなっていたのである。この時代の対応策は規制的手法によるものが主であるが、罰則は緩かったということがわかった。

(第4章の要旨)

第4章では、現代の学生のごみ捨て行動に関する意識をまとめている。その際、フィッシュバインの態度-行動モデルを参考にしている。また、ごみ捨て行動に関する意識の特徴を明らかにするために、飲酒行動と清掃行動に関する意識の特徴も調べて比較している。

本章で現代の学生に関する検討をおこなった理由は、本研究で提唱する「心理的手法を用いた介入計画案」の中に、社会的（もしくは文化的な）背景を取り入れるためである。本章の質問紙調査により明らかになったことは次の3点である。

第一に、現代の学生のごみ捨て行動は、フィッシュバインの態度-行動モデルで説明出来ることがわかった。したがって、現代の学生の適切なごみ捨て行動を誘発するためには、態度や主観的規範に働きかけると効果があることがわかった。

第二に、ごみ捨て行動の仕組みは項目ごと（「紙ごみをきちんとごみ箱に捨てる」、「あき缶を分別ごみ箱に捨てる」、「不要なコピー紙を再生利用にまわす」）に異なっ

て、その項目ごとに適切な対応方法があることがわかった。

第三に、ごみ問題に関する正確な知識と適切なごみ捨て行動の間には関係があることがわかった。

(第5章の要旨)

第5章では、現代の主婦のごみ捨て行動に関する意識をまとめている。その際、主婦のごみ捨て行動に対する①物理的な環境条件と②ごみの分別行動に関する自己評価と他者からの評価という2要因に注目している。

本章で現代の主婦に関する検討をおこなった理由は、本研究で提唱する「心理的手法を用いた介入計画案」の中に社会的な（もしくは文化的な）背景を取り入れるためである。本章の質問紙調査により明らかになったことは次の3点である。

第一に、物理的な環境を整備することは、適切なごみ捨て行動を促進する上で重要であることがわかった。

第二に、単に「物理的な環境のみを整備すれば良い」というわけではなく、「適切にごみ捨て行動を形成するための介入」と同時におこなうことに効果があることがわかった。

第三に、適切なごみ捨て行動が行われても、その行動を生じさせる原因や動機は人によって様々であることがわかった。

(第6章の要旨)

第6章では、現代の学生のごみ捨て行動に関する「本音」の部分抽出しようとしている。その際、ごみ捨て行動を社会的ジレンマ状況に置き換えて分析している。

本章で小集団における実験をおこなった理由は、本研究で提唱する「心理的手法を用いた介入計画案」の中に、より「本音」に近い学生の行動パターンを取り入れ、併せてその様な行動パターンを持つ学生に有効な介入方法を検討するためである。本実験により明らかになったのは以下の2点である。

第一に、ほとんどの学生は直接自分の利益には結びつかない課題（例えば、日常生活においてはごみ問題の様なもの）は無視する傾向があることがわかった。

第二に、学生が直接自分の利益に結びつかない課題に関して、利他的な行動を取るようになるには、トークンエコノミーのような手法を用いて利得構造を変更する必要があることがわかった。

(第7章の要旨)

第7章では、日常生活がおこなわれている場面での適切なごみ捨て行動を誘発するための手法（トークンエコノミー）が実験的に検討されている。

本章で日常生活場面における実験をおこなった理由は、本研究で提唱する「心理的手法を用いた介入計画案」において、具体的な介入方法として位置づけられている応用行動分析（特にトークンエコノミー）の効果を検証するためである。本実験により明らかになったのは次の2点である。

第一に、日常生活がおこなわれている場面で、不特定多数の人々にごみの捨て方に関するメッセージを流すときには、そのメッセージがなるべく一人一人に向けられた個人的なメッセージであるという印象を与えると効果があることがわかった。

第二に、不特定多数の人々のごみ捨て行動を改善するためには、トークンエコノミーによる介入に効果があることがわかった。

（第8章の要旨）

第8章では、日常生活がおこなわれている場面での適切なごみ捨て行動を誘発するための手法（刺激性制御法）が実験的に検討されている。

本章で日常生活場面における実験をおこなった理由は、本研究で提唱する「心理的手法を用いた介入計画案」において、具体的な介入方法として位置づけられている応用行動分析（特に刺激性制御法）の効果を検証するためである。本実験で明らかになったのは次の2点である。

第一に、物理的な環境整備は適切なごみ捨て行動を促進する上で大きな効果があることがわかった。

第二に、単に物理的な環境を整備すれば良いのではなく、適切なごみ捨て行動のパターンが形成されるような介入を同時に行わなくては効果はないことがわかった。

（第9章要旨）

第9章では、第2章から第8章までの調査や実験の結果をもとに考えられた「心理的手法を用いた介入計画案」を具体的に示している。

本論文で提唱する「心理的手法を用いた介入計画案」とは、「個人を取り巻く物理的な環境の整備」と「適切な動機付けを行う環境の整備」を同時に行うことによって、個人のごみ捨て行動を改善させようとするものである。

「物理的な環境の整備」のための具体的な方法としては、①住戸内の環境整備の必要性と②拠点回収システムをはじめとした多様な回収ルートの整備の必要性に関して論じている。

また、「適切な動機付けを行う環境の整備」のための具体的な方法としては、①教育、広報活動による適切な動

機付けの必要性と②トークンエコノミーによる強化の必要性に関して論じている。

本章では、さらに「心理的手法を用いた介入計画案」を現行のごみに関する政策の中に位置づけている。そして、従来からの規制的手法や経済的手法の限界を補う方法として、本研究で提唱している「心理的手法」を同時に用いることを提案している。

（第10章の要旨）

第10章では、各章の総括をし、今後の課題を述べている。

本研究の今後の最終的な課題は、本論文で明らかにした「心理的手法」を現実の地方自治体の清掃行政にあてはめ、その効果を実証することである。

そのためにまず必要なことは、心理的手法を構成している2つの基本的な原則である「個人を取り巻く物理的な環境の整備」と「適切な動機付けを行う環境の整備」に関する具体的な方法（①住戸の環境整備、②多様な回収ルートの整備、③教育、広報活動による適切な動機付け、④トークンエコノミーを用いた動機付けの4点）をさらに整備することである。

そして、その後これら4点を組み合わせて、地域の実状にあわせた対応策をつくり、その効果を検討することが必要である。その際一番大切なことは「それぞれの項目をバラバラに行うのではなく、①物理的環境の整備と②適切な動機付けを行う環境の整備の2点を同時にまとめて行うことである。

#### 4. 本論文の特徴、意義

従来のごみに関する研究では、人とごみとのかかわり、さらにはその対応策に関する歴史的な視点を含んだ体系的な研究はあまり行われていない。また、ごみに関する技術的な研究や社会的・経済的な研究はすでに理論的・体系的に論じられているが、それらが個人のごみ捨て行動の改善にどのような影響を及ぼしているかに関する研究は少ない。またごみを捨てる個人に注目した研究は、社会政策の中での研究の位置づけが明確になされていないものが多く、現実社会での実行可能性が低いものが多い。

このような従来からのごみに関する研究に対して、これまでに論じてきた様に、本論文の持つ特徴と意義は次の2点にまとめることが出来る。

第一に、歴史的な視点を含んだ「個人のごみ捨て行動のパターンとそれがごみ捨て行動に対する対応策」の実態を歴史的な視点を含めて把握分析し、「個人のごみ捨て行動とその対応策」に関する文化的背景を明らかにした

研究であること（第 1, 2, 3, 4, 5 章において見られる成果）。

第二に、個人的な文脈からの対応策の一つである応用行動分析的な手法の効果を実証的に検証した上で、文化的な背景を考慮した個人的な文脈からの対応方法である「心理的手法を用いた介入計画案」の基礎的な構想を示し、現行のごみに関する政策の中に位置づけたこと（第 6, 7, 8, 9 章において見られる成果）。

### 論文審査の要旨

高橋 直君の博士学位請求論文「ごみ捨て行動のパターンとその対応策に関する研究—心理的手法を用いた介入計画書にむけて—」は、第一に、個人のごみ捨て行動のパターンとそこにごみ捨て行動に対する対応策の実態を歴史的な視点を含めて把握・分析することにより「個人のごみ捨て行動とその対応策」に関する文化的背景を明らかにし、第二に、個人的な文脈からの対応策の一つである応用行動分析的な手法の効果を日常生活場面で実証した上で、文化的な背景を考慮した個人的な文脈からの対応方法である「心理的手法を用いた介入計画案」の基礎構想を示し、現行のごみに関する政策の中に位置づけた研究である。従来のごみに関する研究では、人とごみとのかかわり、さらにはその対応策に関する歴史的な視点を含んだ体系的な研究はあまり行われてなく、また、個人のごみ捨て行動の研究は社会政策の中での位置づけが明確になされていないものが多く、本論文では人のごみ捨て行動を歴史的視点と社会政策的文脈の中にとらえつつ、応用行動分析的な手法の効果を日常生活場面で実証することにより具体的にごみ捨て行動の対応策を提示した、極めて意義のある研究である。

論文は、第 1 章では、研究の目的と方法を述べ、第 2 章・第 3 章では、ごみ捨て行動とその対応策に関してその実態の歴史的文化的背景に関してまとめ、第 4 章・第 5 章では、現代の学生や主婦のごみ捨て行動に関する意識を調べている。そして第 6 章では、現代学生のごみ捨て行動に関する本音を、社会的ジレンマゲームという形をかりて調べている。第 7 章・第 8 章では、介入計画案の具体的な手法として位置づけている応用行動分析の効果を日常生活場面で実証的に検討している。第 9 章では、第 8 章までの検討をもとに「心理的手法を用いた介入計画案」の基本的な構想を示している。第 10 章では、各章の総括と今後の課題に関してまとめている。各章の論点を要約すれば以下の通りである。

第 1 章「研究の目的と方法」では、研究の目的、先行

研究のレビューと本研究の意義・位置づけ、ごみ捨て行動にかかわる基礎概念、研究の構成と研究方法について述べている。本論文の基本的な概念に関する定義を記すと、

①ごみ：日常生活を営む個人が不必要だと判断したものの総称。「廃棄物」は一般廃棄物と産業廃棄物を合わせた総称であるのに対し、「ごみ」は一般廃棄物とはほぼ同じ概念で使われる。産業廃棄物は「ごみ」とはいわない。

②ごみ捨て行動：日常生活を営む個人が不必要だと判断したものを私的空間（自分の身辺）から公的空間（自分の身辺から離れたところ）へ移動させる行動のこと。本研究では、個人のごみ捨て行動のパターンは日常生活で経験される様々な強化子によって強化されると考えている。

本研究では、「ごみ捨て行動」の下位概念として「廃棄目的のごみ捨て行動」（不必要だと判断したものを廃棄を目的に私的空間から公的空間へと移動させる行動）と「再利用目的のごみ捨て行動」（不必要だと判断したものを再利用を目的に私的空間から公的空間へ移動させる行動）があると定義している。

③対応策：全体的なごみ問題を解決することを目的にとられた主に行政による条例や規則・提案をさす。本研究で扱う具体的な対応策は次の 3 つである。

(1) 規制的手法による対応策（従来の、有害な汚染源の特定化が明確に出来る問題に対して取られてきた手法のこと）。

(2) 経済的手法による対応策（発生源や加害者・被害者を特定しにくい時に用いられるもので、汚染者が負荷量に応じて費用を負担する手法のこと）。

(3) 心理的手法による対応策（発生源や加害者・被害者を特定しにくい時に、用いられるもの）。「個人を取り巻く物理的な環境整備」と「適切な動機づけを行う環境の整備」を行うことからなる応用行動分析の方法が本論文には組み込まれている。

第 2 章「歴史にみるごみ捨て行動のパターンと対応策 1—江戸時代までのごみ問題」では、まずはじめにごみ捨て方を歴史的な観点から 6 つの類型に分類している。第 1 段階「ごみがほとんど出ない」段階、第 2 段階「住居エリアに穴を掘って埋める」段階、第 3 段階「溝な

どに捨てて住居エリアから外に出す」段階、第4段階「海や山など非居住地域にそのまま捨てる」段階、第5段階「火で焼いてから非住居エリアにごみを捨てる」段階、第6段階は「リサイクルする」段階となっている。本章では、第1段階から第4段階までごみ捨て行動のパターンとその対応策の特徴を、狩猟・漁猟時代、奈良時代、平安時代、鎌倉時代、近世江戸時代と時代を追って、歴史的な史料の分析により明らかにしている。平安時代までは、ごみは敷地に穴を掘って捨てたり、道路に捨てたりするものであった。ごみが問題になったケースはあまりなかったようであるが、平安時代にはごみ問題が「都の美観を保つための問題」として取り上げられたことがある。この時代の対応策は規制的手法によるもので、かなり厳しい罰を伴ったものであった。しかし、その効果はあまりなかったようである。鎌倉時代の鎌倉には、都市機能維持の問題及び防衛問題としてのごみ問題が存在した。この時代の鎌倉人は、ごみを溝に蹴り落とすというごみ捨て行動を主にしていたが、この溝は鎌倉を都市として機能させるために重要なものであったので、この行為が問題になった。この時代の対応策は、規制的手法によるものであった。具体的には、町役人の監督の下で住人に掃除をさせるというものであった。江戸時代の江戸には、都市防衛問題（防火対策）、都市機能維持問題（水路確保対策）、および新田開発に代表される開発問題としてのごみ問題が存在していた。この時代の江戸人は、初期には自宅周辺にごみを投棄していた。それが禁止されると次には水路に投棄していた。しかし、ほどなくそれも禁止され、最終的には幕府によって決められた「ごみ収集から運搬・処分」ルートにそったごみ捨て行動を取るようになった。この時代の対応策は、規制的手法によるものが主であったが、後期になると経済的手法とも考えられる対応策も取られるようになっていった。

第3章「歴史にみるごみ捨て行動のパターンと対応策2—ある婦人雑誌を通した大正時代からのごみ問題の検討—」では、第5段階以降のごみ捨て行動のパターンとその対応策の特徴をまとめている。その際、とくに①大正時代、②昭和11年から昭和20年までの国家総動員法公布下の時代、③昭和34年から昭和43年までの高度経済成長下の時代の3つの時代を取り上げている。それぞれの時代の主に主婦のごみ捨て行動を、婦人雑誌「主婦之友」「婦人の友」を通して分析している。これによって明らかにされたことは、大正時代の主婦達は、日常生活の中でリサイクル（廃物利用）を行っていたがそ

の動機は、自己の家計の防衛のためであったと考えられる。この時代の対応策は規制的手法によるものであるが、罰則はかなり緩いものであった。次に、国家総動員法下の主婦達は、前期には戦争費用捻出のための貯蓄を増やすための手段として再利用をおこなっていた。そして後期には自分や家族が生きるための手段として再利用をおこなっていた。再利用をおこなわないという選択肢はほとんど残されていなかったのがこの時代の特徴である。さらに、高度経済成長下の主婦達は、「消費は美德」の時代の雰囲気を感じてはいたが、その雰囲気が直接「使い捨て」につながったわけではなかった。消費を行うためには、節約をしてお金を貯めなくてはならなかったで「再利用」もかなり日常におこなっていたのである。この時代の対応策は規制的手法によるものが主であるが、罰則は緩かった。

第4章「質問紙調査にみるごみ捨て行動のパターンとその対策1—現代学生の場合—」においては、296名の現代学生のごみ捨て行動に関する意識をまとめている。その際、フィッシュバインの態度—行動モデルを参考にしている。また、ごみ捨て行動に関する意識の特徴を明らかにするために、飲酒行動と清掃行動に関する意識の特徴も調べている。本章の質問紙調査により明らかになったことは、①現代の学生のごみ捨て行動は、フィッシュバインの態度—行動モデルによると、現代の学生の適切なごみ捨て行動を誘発するためには、態度や主観的規範に働きかけるとある程度効果が期待できることがわかった。②ごみ捨て行動の仕組みは項目ごと（「紙ごみをきちんとごみ箱に捨てる」、「あき缶を分別ごみ箱に捨てる」、「不要なコピー紙を再生利用にまわす」）に異なっていて、その項目ごとに適切な対応方法があることがわかった。③ごみ問題に関する正確な知識と適切なごみ捨て行動の間には関係があることがわかった。

第5章「質問紙にみるごみ捨て行動のパターンと対応策2—現代の主婦の場合—」では、東京に在住する主婦56名、福島県に在住する主婦38名、神奈川県に在住する主婦23名、計117名のごみ捨て行動に関する意識をまとめている。その際、主婦ごみ捨て行動に対する(1)物理的な環境条件と(2)ごみの分別行動に関する自己評価と他者評価という2要因に注目している。本章の質問紙調査により明らかになったことは次の3点である。①物理的な環境を整備することは、適切なごみ捨て行動を促進する上で重要であることがわかった。②単に「物理的な環境のみを整備すれば良い」というわけではなく、「適切なごみ捨て行動を形成するための介入」と同時に

行うことに効果があることがわかった。③適切なごみ捨て行動が行われても、その行動を生じさせる原因や動機は人によって様々であることがわかった。

第6章「小集団における協力的な行動を誘発する要因について—1事例による探索的研究」では、ごみ捨て行動のように直接利益につながらない課題は無視するものではないかという、ごみ捨て行動に関する「本音」の部分をはきだすため、ごみ捨て行動を社会的ジレンマ状況に置き換えて5名の学生からなる小集団実験を行っている。その結果、①ほとんどの学生は直接自分の利益には結びつかない課題は無視する傾向があることがわかった。②直接自分の利益に結びつかない課題に関して、利他的な行動をとるようにするには、トークンエコノミーのような手法を用いて利得構造を変更する必要があることが確認された。このことから、本研究の目的である「心理的手法を用いた介入計画案」を考える際、ごみ捨て行動のような行動はそれを誘発するには、トークンエコノミーのような手法を用いることが有効であることが示唆された。

第7章と第8章は適切なごみ捨て行動が生じるために、野球場とある商店街を実験場面として実際に介入実験を応用行動分析の方法を用いて行っている。

第7章「適切なごみ捨て行動が生じるために 1—ある野球場におけるごみ捨て行動への介入—」では、プロ野球2軍戦をする野球場を6日間貸り、そこに観戦にきた観客のごみ捨て行動を応用行動分析の手法によって制御を試みた。第1日目と第6日目はコントロール期、第2日目はごみ袋のみの条件、第3日目はごみ袋に「ごみをこの袋に入れてください。そうすれば、みんなの模範になります。」という正の促進をうながすメッセージをいれた。第4日目はごみ袋に「ごみをこの袋に入れて下さい。そして、賞品をあてましょう。あなたのごみ袋の番号は賞品が当たっているかもしれません。お帰りの際、ごみ袋を出口まで持っていき、当たり番号を見て下さい。」というメッセージを入れ、トークンによる正の強化をおこなった。第5日目はごみ袋に「ごみを散らかすのはやめましょう」という負の促進をうながすメッセージを入れた。この結果は、第4日目に行ったトークンエコノミーによる介入が最も効果があることが実証された。このように不特定多数のごみ捨て行動を改善するためには、トークンエコノミーによる介入が効果があることがわかった。

第8章「適切なごみ捨て行動が生じるために 2—ある商店街におけるごみ捨て行動への介入—」では、日常

生活が行われている場面での適切なごみ捨て行動を誘発するために応用行動分析の刺激性制御法を用いて実験を行っている。ABABデザインを用い、Aはベースライン期で、Bの介入期には通常設置されているごみ箱8か所にあき缶あきビン専用のごみ箱を設置した。ベースライン1期3週間、介入1期1週間、ベースライン2期1週間、介入2期1週間のごみ捨て量とあき缶の道路に捨てられている量を計測した。この結果、あき缶あきビン専用のごみ箱を設置した介入期のほうが、設置していないベースライン期に比べ、とくにあき缶のごみ捨て行動は促進された道路に放置されたあき缶は減少した。物理的な環境整備は適切なごみ捨て行動を促進する上で大きな効果があることがわかった。

第9章「心理的手法を用いた介入計画案の試み」では、第2章から第8章まで調査や実験をもとに考えられた「心理的手法を用いた介入計画案」を具体的に示している。そこでは、「個人を取り巻く物理的な環境の整備」と「適切な動機付けを行う環境の整備」がふくまれており、「物理的な環境の整備」のための具体的な方法としては、①住戸内の環境整備の必要と、②拠点回収システムをはじめとした多様な回収ルートの整備の必要性についてのべている。また、「適切な動機付けを行う環境の整備」のための具体的な方法としては、①教育、広報活動による適切な動機付けの必要性と、②トークンエコノミーによる強化の方法が適切に用いられる必要性について論じている。さらにこの「心理的手法を用いた介入計画案」を現行のごみ捨てに関する政策の中に位置づけ、従来からの規制的手法や経済的手法の限界を補う方法としてこの心理的手法を提案している。

第10章「総括」では、各章を総括し、今後の問題をのべている。本論文の今後の最終課題は、本論文で明らかにした「心理的手法」を現実の地方自治体の清掃行政にあてはめ、その効果を実証することである。

本論文の最も価値あるところは、野球場や商店街という自然状況の中でごみ捨て行動の実験を行った点である。こうした研究は事前の交渉やセッティングに労力がかかり実験の形にまでもっていったことは高く評価したい。さらに、ごみ捨て行動を歴史にさかのぼって考察し、時代状況によって変化してきたことを分析していることも評価したい。ただ、この論文の難点をあげるとすれば、ごみ捨て行動の問題をあまりにも幅広く論じようとしたためにやや冗漫になり、もうすこし取捨選択が必要であったと考えられる。また、ごみ捨てに対する一般的態度や社会規範がすぐさまごみ捨て行動に結びつかないこ



とを論じている個所で、そのようなストレートな論調になっていないところが見受けられた。

このような問題点を指摘できるが、これらは本論文の全体的価値を特に低めるものではないであろう。本論文において著者が行った、ごみ捨て行動の歴史的考察と応用行動学的実験は、ごみ捨て行動を社会状況と心理行動的側面の両面から総合的にとらえることに成功してい

る。さらにごみ捨ての清掃行政の施策にまで提言をしていることは研究成果を実践的にすこしでも役立たせたいという著者の熱意の現れである上、この論文をいっそうユニークなものとしているといえるだろう。

本論文が博士（社会学）の学位を受けるにふさわしいものであると判断するものである。

## 記

### お詫びと訂正

本紀要第 45 号に誤りがございました。謹んで訂正申し上げます。

編集委员会主任 富安 芳和

1. 中扉の表記中 Editors を Organizers に改めます。
2. CONTENTS の次の頁の写真を削除します。

### 正 誤 表

21 ページ	左 2 行目	on→of に変更
24 ページ	左 11 行目	stimuli→削除
	49 行目	of→削除
26 ページ	左 14 行目	Lumusden→Lumsden に変更
28 ページ	左 4 行目	natural those→natural than those に変更
35 ページ	右 40 行目	tended→tend に変更
47 ページ	左 30 行目	式 (3.1) 左辺 $P(E_i F) \rightarrow P'(E_i F)$ に変更
55 ページ	左 18 行目	on→of に変更

### 謝辞

本号掲載の英文論文および英語表記に関して、ボランティアとして Dr. Stephanie B. Stolz の校閲を頂いた。ここに記して感謝の意を表する。

社会学研究科紀要編集委員会